

テーブルマナー研修を終えて

食物栄養専攻

矢 埜 みどり

今年初めての試みとして、フレッシュマンキャンプをかねて、テーブルマナー研修が行なわれた。食物栄養専攻の学生は食と関わる仕事に従事するわけであるから必要な知識と思われるが、生活福祉専攻の学生にまで経済的負担をかけることに若干の抵抗を覚えるとの意見もあったが、“マナーとは何?”との問いかけのもと、新入学生全員に対する研修となった。

多くの人間は、“自分の考えが常識”と思いこんでおり、自分の行動が相手に不快な印象を与えると考えていない。しかし自分が当たり前と思うことを相手が当たり前と思うかどうかは不明なのだ。自分の考えが常識であるという思い込みが、相手との意思疎通をさまたげ世の中のトラブルの原因になっている。つまり、食事という人と人とのコミュニケーション形成にもっとも有効であるといわれる場においても、個人個人の思い込みによる何気ない行動により相手に不快な思いを与えることは良くあることなのである。しゃべりながらナイフを振り回す、本人は楽しく会話しているつもりでも周りは落ち着かない。スープをずるずる音を出しながら飲む。本人はラーメンの汁と同様な気持ちで飲んでいても相手はその音が耳に障って仕方ない。自分では何気ないと思っで行っている行動が、相手にとってどのような印象を与えるか?すべての行動を振り返る良いきっかけになればよいと思う。食べているときに怒る人はいないとよく言われるが、そのような和やかな時間であるからこそ、相手を不快にさせない思いやりが必要であると思われる。その気持ちの現れがマナーであるなら、社会に出て行く学生が教養の一つとして身につけておくべきもの考える。

相手がどのように思うかばかり考えていては、確かに世の中生きていけない。しかし、美しい身のこなしや立ち振る舞いは相手に気持ちよさを与えるものである。「形にとらわれるのはおかしい、中身が大切」との意見もあるが、画家や書道家は、まず模倣から始める。形から入ることによって初めて自分の表現する物が描けるようになるのである。“たかが形されど形”。

マナーにとらわれて楽しく食事を味わうことを忘れては本末転倒であるが、常に相手を思いやる気持ち、相手に不快な思いをさせない心配り、その気持ちを持った社会人になるためのはじめの一步になる研修に各自が消化してくれることを願う。